

(2014年度)

国語

次に示すのは森沢明夫『海を抱いたビー玉』(小学館文庫)の一節である。「僕」と「ぶんちゃん」は幼なじみで今は小学校六年生である。これを読んで後の問いに答えなさい。

その日は、自称、雨男のぶんちゃん心配をよそに、空はおもいきり晴れわたった。まさに『おもいきり川遊び!』ツアーにはもってこいの⑦テンコウだ。

僕ら同級生は、④カセツ住宅の入り口のところに集合して、ネコバスの到着を①首を長くして待っていた。

「そろそろ、くるんじゃないか」

保護者の代表として一緒に行くことになったお父さんが、腕時計をチラリと見ていったら、本当にやってきた。

「うわ、かわいいっ!」

「ホント、ネコバスみたい!」

遠くからやってきたボンネットバスを見て、みんなのテンションは一気にあがっていった。お父さんも歯が見えるほどの笑顔で、「うわー、あれに乗れるのかぁ」とご満悦だ。

笑った猫みtainな顔をしたバスは、なんだかゴロニャンゴロニャンという感じのエンジン音をたてながら、とても楽しそうに走ってくるように見えた。

やがて、バスよりもっとにこにこ顔をした運転手さんが、僕らの目の前にびたりとバスを停めた。

ゴロニャンゴロニャンゴロニャン……。

予想していたものよりも、ずっとかわいいバスだった。ペットみたいというか、なんというか、とにかく生きているような雰囲気がある。漂っているのだ。

昔の乗り物って、みんなこんなのかな——と、感動していたら、ぶんちゃんが⑨ヨってきて「なあ、あの運転手さん、えびす様みたいな顔してると思わねえ?」とささやいた。

うん、なるほど、似てるかも。

別のおじさんがボディの真ん中あたりにあるドアを⑤アけて、僕らを④マネき入れてくれた。

「すげー」

「タイムスリップしてみたーい」

車好きの②レンチュウは、③サツソク運転席の方へと集まっていき、歓声をあげている。お父さんもいちばん前の席に行つて、えびす顔の運転手さんに挨拶をしていた。

ものすごく古いバスのはずなのに、外見も中身も、とてもきれいだった。丁寧に磨かれているに違いない。

僕も本当はいちばん前の席で、運転する様子を見たかったのだけれど、なぜかぶんちゃんがどうしてもいちばん後ろのベンチシートがいいという張つたので、⑧シカタなくそれにつき合うことにした。

青いベンチシートに腰掛けると、スプリングがぼよんぼよんしていて、気持ちよかった。この上にゴロンと横になって昼寝でもしたら⑥カイテキだろうな、なんて考えてしまう。

しばらくすると、お父さんが②テンコをとって、えびす顔の運転手さんにOKを伝えた。

そして、バスはブルブルと車体を震わせながら、真っ青な夏空の下、ゆっくりと走りだした。

バスはすぐに関越自動車道に乗って、ぐんぐんスピードをあげていった。冷房はないけれど、高原のさらっとした風が入ってくるから、さほど暑くはなかった。

「なんか、遠足って感じで、いいね」

僕が笑いかけると、ぶんちゃんは「うん」と応えたものの、どこか浮かない顔をしていた。

またセンチメンタルになってるな——こういうときは、うまいお菓子に限るぜ、と思って、リュックからさっそく新発売のチョコを出そうとしたとき、僕は手をすべらせてしまった。チョコの箱は空中でクルリと回転しながら、ぶんちゃんの膝に当たって、コトリと乾いた音をたてて前席の下の床に落ちた。

ぶんちゃんは、きゆうくつそうに身体を折って、落ちたチョコの箱に手を伸ばしてくれた、と思ったら、

「ん、なんだ、コレ？」

チョコと一緒に、なにかを拾い上げた。

「たつちゃん、ほら、ビー玉発見」

ぶんちゃんはチョコを僕に渡すと、手のひらに拾ったビー玉をのせて見せてくれた。きれいな青い色をしたビー玉だった。よく見ると、中心の細かい気泡のあたりが、わずかに発光しているような気がする。

「なんか、不思議な感じのビー玉だね」

「うん、たつちゃんもそう思うか」

ふたりで、【A】眺めた。そのとき、僕はふと思った。

「これ、どこかの海の色みたいだ。光がゆらゆらして見える」

「海、か——」

ぶんちゃんは、なぜかがっかりしたような声を出した。

海に、なにか嫌な思い出があったっけ？

「なんだよ、ぶんちゃん。せつかくの最後の夏のイベントなんだから、元気出していこうぜ」

僕は「ほら」といって、箱のなかからチョコを差し出した。

でも、ぶんちゃんはビー玉をにぎったまま、黙り込んでしまったのだ。

「ぶんちゃん……？」

僕は落ち込む意味がわからなくて、少しのあいだ言葉を失いながら、ぶんちゃんを見ていた。差し出したまま行き場を失っていたチョコを自分の口に放り込んだ。舌のうえで甘さとほろ苦さが広がった。ものすごくうまいチョコだったはずなのに、あまり感動がなかった。

ゴロニャンゴロニャンゴロニャン……。

僕らとは逆に、バスはすごく楽しそうだ。前の方の席に座っている同級生たちも、みんな大笑いしている。

一分ほどして、ようやくぶんちゃんは口を開いてくれた。②その一分が、ものすごく長い沈黙に感じられた。

「たつちゃん……、海、好きか？」

ぶんちゃんは、ビー玉が落ちていた前の座席の下あたりに視線を置いたまま、少し唖れた声でつぶやいた。

「好きだよ。あんまり行ったことはないけど」

「日本海は——？」

「オレ、太平洋、見たことないもん。日本海には翡翠っていう宝石がとれる海岸があつて、そこにお父さんと翡翠ひろいに行ったことがあるんだ。たしか、糸魚川つてところだったかなあ」

ぶんちゃんは「ふうん」と小声で応えると、肩で大きく息を吸い、そして、吐き出した。

そのとき——。

凜。

ぶんちゃんの手の上のビー玉が、かすかに光った気がした。

「たっちゃん、じつはオレ……」

僕はこのとき、ざわざわとした胸騒ぎを覚えた。

嫌な予感がしたのだ。

「じつは、オレ……」

「……なに？」

心臓がどきどきしているのが、わかる。

「二学期から、柏崎に行くんだ」

③え？

柏崎がどこにあるのかは知らなかったけれど、新潟県内のどこかだということくらいはわかる。

「行くって、どういうこと？」

「……転校、することに、なってるんだ」

転校って——。

しかも、なってる、って？

食道と胃袋をつないでいる管を、ぎゅうつとにぎられたみたいになった。頭ではなにかをいおうとしているのだけれど、胸の奥から上に空気があがっていかないような、④もどかしい感覚を味わっていた。気持ちを、声に変換できない感じだった。

「うちの養鯉池、地震でぜんぶ崩れちゃっただろ。あれを直すのにはすごくお金がいるみたいで……。だから父ちゃん、もう鯉はあきらめて、ずっと前から柏崎のおじいちゃんやっている会社で働かせてもらってるんだ」

そのことは知っていた。柏崎のおじいちゃんというのは、ぶんちゃんの母方の祖父にあたり、その人が経営する機械の部品工場で、重おじさんは働いているはずだった。朝早くから車で出勤している姿を、僕は何度か見かけている。「母方の親戚のところだから、重ちゃん、肩身のせまい思いをしているかも知れねえな——」と、前にお父さんがお母さんに話していたのを耳にしたこともあった。

「山古志にもどっても、仕事はいまみたいに車で通えるだろ」

ぶんちゃんに文句をいっても仕方がないってことくらいわかってはいたけれど、⑤でも、つい責めるような口調になってしまった。

「ごめん……」

なんだよ、あやまるなよ——。

窓の外の風景は、夏の陽光をいっぱいに浴びて、まぶしくくらいに輝く緑色だった。こんなにキラキラした世界のなかを走っているのに、僕は呼吸の仕方を忘れてしまったみたいに、ひとりでもがいていた。いや、ひとりじゃない。ぶんちゃんも、僕以上に苦しいのだろう、きつと。

「二学期っていったら、もう、すぐだけど」

「うん」

なんでもっと早くいつてくれなかったんだよ——喉元まで出かったトゲのある言葉をぐっところえたら、それは肺のなかで濃密なため息に変わって、透明なまま車内に吐き出された。

わかってるよ——。

ぶんちゃんは、いいたくても、いえなかったんだ。だから、このところずっと凹んでいたんだ。だから、最近ちよつと痩せてしまったんだ。そして、このことを告白するために、あえてみんなと離れたいちばん後ろのベンチシートに僕を誘ったんだ。

「みんなは、まだ知らないの？」

⑥僕なりに、優しい声を出してみた。

「たっちゃんがいちばんに決まってるだろ」

気持ちはいれしかったけれど、でも、その何万倍も悲しかったから、僕は素直に「ありがとう」とはいえなくて、ただ「そっか」と短すぎる単語をつぶやいてしまった。

ぶんちゃんは、ビー玉をもういちど手のひらに置いて、【B】眺めた。

「はあ。海の色、か……」

小声でつぶやく。

凜。

また、ビー玉が光った気がした。

すると、ぶんちゃんの表情に、ふっと決意のようなものが浮かんだように見えた。

「なあたっちゃん。柏崎には海があるんだ。海岸に宝石はないかも知れないけど、オレが引越したら、遊びにこいよ」

⑦「うん……」

やっぱり、引越しちゃうんだ――。

今度は僕がうつむく番だった。

「ずっと、いえなくて、ごめんな」

「いいよ、そんなこと」

また、しばらくのあいだ会話が途切れた。

窓の外から勢いよく流れ込んでくる夏の風におでこをあててみたら、すごく心地よくて、でもなぜかその分だけ淋しい気持ちにもなった。

僕は、次という言葉を探していた。でも、気持ちがまだぐちゃぐちゃで、どうにも整理がつかないでいた。

すると、ぶんちゃんは、いきなり僕の手からチョコの箱を奪うと、勝手にひと粒とりだしてパクリと食べた。そして、笑おうとしたけれど失敗してしまったみたいで、へんてこで哀しい顔をした。

「今日は、本当に、最後の思い出になっちゃうから……」

その声にビクツとした僕は、まっすぐにぶんちゃんを見た。

ぶんちゃんは、チョコを口に入れたまま、泣いていた。

下唇をぐつと突き出して、昔のまんまの泣き顔で。保育園のころから、少しも変わらない泣き顔で、泣いていたのだ。

「最後だから……、たっちゃんと……、おもいつきバカなこととして遊びたいんだ」

ぶんちゃんは、そんなことをいって、今度は急に「あはは」と淋しげに笑いながらポロポロと涙をこぼした。

⑧なんだよ、その泣き笑い――って思ったら、それがふいに僕にまで伝染してしまって、ぶんちゃんとまったく同じように「あはは」と声を出して笑いながら、泣いてしまった。

そして、ふたりそろって、手首でごしごしと涙をぬぐった。

顔をあげて、目が合ったとき、いつか仲直りをしたときとよく似た、ちょっと恥ずかしいような、くすぐったいような気持ちになっていた。

えへへ……。

ふたりで、困ったように笑う。

ぶんちゃんのいうとおり、⑨いちばん後ろの席でよかった。

問1 — ⑦ㄱ③のカタカナを漢字に直しなさい。

問2 — ①「首を長くして待っていた」を言いかえた表現として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 待ちあぐねた イ 待ちうけた ウ 待ちかねた エ 待ちくたびれた オ 待ちこがれた

問3 「A」と「B」には同じ語句が入る。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア しみじみと イ じろじろと ウ ぼんやりと エ まじまじと オ わくわくと

問4 — ②「その一分が、ものすごく長い沈黙に感じられた」について、なぜこのように感じたのか、わかりやすく説明しなさい。

問5 — ④「もどかしい感覚を味わっていた」について、この時の気持ちとして**当てはまらないもの**を次からひとつ選び、記号で答えなさい。

ア 自分の今の気持ちをなんとか言葉にしたい

イ あまりに急なことで頭が混乱してしまう

ウ 転校の話をされるなんて思わなかった

エ 何をどう聞けばいいのかわからない

オ どうかして転校をやめさせたい

問6 — ⑤「でも、つい責めるような口調になってしまった」について、なぜこのような口調になったのか、わかりやすく説明しなさい。

問7 — ⑥「僕なりに」について、この時の「僕」の気持ちをわかりやすく説明しなさい。

問8 — ⑦「うん……」について、この時の「僕」の気持ちを六十字以内で説明しなさい。

問9 — ⑧「なんだよ、その泣き笑い」について、この時に言いたかったこととして最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

アなんだよ、みんながこっちを見ちやうじゃないか

イなんだよ、無理して笑おうとしなくてもいいよ

ウなんだよ、ちっとも成長してないじゃないか

エなんだよ、そんなにびつくりさせるなよな

オなんだよ、相変わらず不器用なやつだな

問10 — ⑨「いちばん後ろの席でよかった」について、「僕」がこのように思った理由をわかりやすく説明しなさい。

問11 — ③について、最近「え？」と思ったときのことを具体的に教えて下さい。

(2014年度)

国語 解答用紙 その一

受験番号

氏 名

[illegible]

(2014年度)
国語 解答用紙 その二

受験番号

氏 名